随想　伊勢・赤福のブラックジョーク

～笑ってすませられないのは原発再稼働への舵～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

八月六日号の週刊文春を流し読みしていて、プッと吹き出してしまった。一二一頁の《伊勢のおかげだより》という囲み漫画を読んでいたときのことである。

舞台は多分江戸時代、場所は京都か伊勢か、とにかく関西であろう。

おかみさんとお嬢さんとおぼしき二人が笊の上の魚をクンクン嗅ぎながら、

『この魚ちょっと古いけど』。

つぎのコマで猫がソッポを向いて行き、

『大丈夫かな～?』。

旦那と思われる男がムシャクシャ食べながら、

『こりゃうまい!』。

次のコマでは奥さんとお嬢さんがお茶を飲みながら、

『大丈夫みたいやな～』

とくつろぐ。

という四コマ漫画である。

これがほかの宣伝漫画であれば、なんということもない下手なジョーク漫画であろう。しかし、スポンサーが伊勢の赤福となれば、受け止める方もちょっと違う。

読者の方々も覚えておいでだろう。赤福といえば、売れ残りを回収して《巻き直し》などの名目で再生した製品を販売し、食品安全性とコンプライアンス問題で大きなセンセーションを起こした当事者である。

あれから一〇年も経たずに、この漫画を堂々と週刊誌に掲載する主旨がよく見えない。サブタイトルの《ものは試し、の巻》というのも笑える。

八月八日の東京新聞二二～二三面に川内原発再稼動に関する記事が掲載されている。記事全体を紹介するには紙幅が足りないので、タイトルを列挙してみる。

- ●川内原発迫る再稼動に不安
- ●『保守点検』認可義務なし
- ●三〇年超の原発大丈夫?
- ●不備続々『福島市の反省見えず』
- ●全国に一八基　高浜二基も認可待ち

この記事内容には、原発運用における矛盾点がさまざまに紹介されている。なかでも気になるのは、点検作業規定の運用ミスである（点検作業規定が適正であるかどうかにも問題がある、と指摘）。

東北電力が女川原発二号機で過去三年間に四、一八八件の整備点検ミスがあった、ということを明らかにした。

データ採取時刻の記入漏れなどの単純ミスに混じって、実際には存在しない計器や部品を点検した、といういい加減な報告が二〇七件もあり、ほかに事故に繋がりうるボルトの緩みなど問題を放置した例も一三七件あった、という。

これが発覚したのは、原子力

規制庁の保安検査がきっかけだった（全体調査で膨大な不備が見つかり、東北電力は『品質保証の取り組みに弱いところがあった。率直に反省している』と謝罪）。

同様の問題は、中国電力、島根原発、東京電力でも明らかになっている。

記事の中で保母武彦島根大名誉教授は『電力会社の人たちが安全神話体質から抜け切れていないことが背景にある』と指摘している。

東電の福島原発事故からまだ五年も過ぎていない今日、《福島の再生なしに日本の再生なし》とお題目を語りながら、すでに事故の過去から目を逸らして、原発再稼動へ方向を切り替えている為政者の厚顔さはかつての赤福がおこした事件と今回のブラックジョークとの対比よりはるかに酷いジョークと思われてならない。

二〇一一年の東日本大震災にともなう東電の第一原発事故のおり、時の総裁菅直人氏は、当初理系である自身の過剰な自信のゆえか、本来中央にいて動かず、国全体に対しての配慮を前提とした指示をせねばならない立場をわきまえもせず『原発上空へヘリコプターを飛ばし、自分の目で現状を確認したい』という欲望を抑えきれなかったようである。

この一連の判断は素人である著者からみても《お粗末》と言わざるを得ない。

また、それ以前の政権担当者であった、かの鳩山由紀夫氏の米軍基地移転についての軽はずみな言動は、みなの失笑を買うものであったことは疑いもない。

これほどの素人集団である民主党に、国民が『国を預けよう』と考えたのには、その前の《自民党》の驕り高ぶった挙動に我々が辟易としたためであった。

しかし、呆れるほどの政治リーダーシップ欠如を露呈した《民主党》ですら、原発のもつ致命的な欠陥を放置できないことには気づいて、原発依存の電力供給を再生可能なエネルギーに転換し、原発廃炉の方針を明確にした。

著者は原発を《トイレのない家》と表現している。排泄する放射性廃棄物をいかに処理するかが決められていないわが国の原発は著者には《トイレのない家》と感じられてならない。

いったん民主党が決めた一国の将来を決める《原発廃炉》という方針を国民の付託を受けた、という自負のみで国民に問うことなく変更し、再稼動へと舵を切っている。

これのみならず、安保問題や集団的自衛権の拡大解釈による他国への攻撃の可能性拡大（本来は憲法改訂について国民の意思を問い、その肯定に基づき行うべき決定事項であるはず）、反対意見に一顧すらしない安倍総理日本に対し、かつて自民党の舵取をしたいわゆる長老たちが、疑問を投げかける流れにすらなっている。

著者はここで、安保と自衛権の拡大解釈についてまで論を広げようと思わない。しかし、福島県で生きてきて《原発事故の何たるか》を骨身に染みて感じた自身の体験を通じて《原発廃炉》という民主党の決めた国の方針は堅持されるべき、と主張したい。

さきの《赤福のブラックジョーク》は笑ってすませるが、安倍首相の《過去を曖昧にして自己の主張を通す》いまのやり方はブラックジョークと笑ってすませられない不気味さを感じてならない。

注：赤福事件

２００７年10月12日に伊勢の名物《赤福》でおきた、ＪＡＳ法違反事件。農水省によると、赤福は出荷の際余った餅を冷凍保存して、解凍した時点を製造年月日に偽装して出荷していた。赤福は、解凍しての再包装を「まき直し」と称していた。

偽装は、未出荷のものもあれば、配送車に積んだまま持ち帰ったものもあった。さらには回収した赤福餅を、餅と餡に分けて、それぞれ「むき餅」「むき餡」と称して、自社内での材料に再利用、関連会社へ原料として販売していた事実も発覚した。